

学生が保育省察力を獲得するための方略に関する一考察
 - 幼稚園教育実習における実証的研究から -

山田 秀江*

A study of strategy for students to acquire the ability to reflect on Childcare
 -From empirical research in kindergarten education practice-

Hidemi Yamada

本研究では、保育省察力の基礎を身に付けるための方略として、幼稚園教育実習での実証的研究の有用性を検討することを目的とした。

学生が保育者モデルとしての現職保育者の実践（行為）を観察し、その保育場面を事例として言語化した上で、考察し、より良い援助方略を導き出すという、実証的研究を教育実習の課題とした。学生のレポート内容を質的に分析し、その有用性を検討した。

その結果、援助に関する具体的な自己課題を持つことで保育を見る視点を明確化し、課題に関する事例を言語化することで、保育という営みをメタ認知することができていることがわかった。そして、子どもと保育者の思いや関係性、それぞれの行動の意味を客観的に考察し、援助方略について考えることができていた。これらのことから、保育省察力の基礎的な力としての保育の見方・考え方を養い深めることに実証的研究は有用であることがわかった。

Key words: 省察 保育の見方・考え方 実証的研究 幼稚園教育実習

第1章 問題と目的

保育所、幼稚園、こども園等の保育現場では、保育ニーズが多様化し、より質の高い保育が求められている。そのために、高い資質能力を持った保育者（教員）の養成が喫緊の課題である。今日的課題に対応できる新しい学力観を理解し、新しい教育内容や教育方法等に実践的に取り組める保育者を養成するため、教員養成カリキュラムと保育士養成カリキュラムが改訂された。教職課程コアカリキュラム¹⁾では、実践力の養成を重要視しており、教育実践に関する科目として教育実習（学校体験活動）を位置づけ、その全体目標は「教育実習は観察・参加・実習という方法で教育実践に関わることを通して、教育者として愛情と使命感を深め、将来教員になるうえでの能力や適

性を考えるとともに課題を自覚する機会である。一定の実践的指導力を有する指導教員のもとで体験を積み、学校教育の実際を体験的・総合的に理解し、教育実践ならびに教育実践研究の基礎的な能力と態度を身に付ける」としている。

学生が実習を通して、教育（保育）実践力や教育（保育）実践研究の基礎的な能力や態度を身に付けるためには、実習自己課題を持ち、主体的に取り組む、体験を通して自らの課題を考察し、保育理解と自身の学びを深めることが重要である。

また、小川（2013）²⁾は保育実習に関して、「経験を重視しつつも、そこから自己の保育経験をよりよく改善していく反省的思考を導く具体的手立てを実践する必要がある。その出発点は幼児という存在と『保育者』の関係理解である」と述べている。また、自らの実践を反省し、次の実践へ繋げることができる保育者を養成するための知識・技能の確立が必要であり、そのためには、学生たち

* 四條畷学園短期大学 保育学科

に保育の見方、考え方を伝える必要があると述べている³⁾。

教育（保育）実践を省察し、改善点を見出し、次の実践に繋げていくことは、教育（保育）実践力の要素として極めて重要な力である。

学生は実習を通して、省察力の基礎を身に付けることが必要となる。本学の学生の実態として、実習で子どもとのかかわりや保育者の観察、設定保育の実践など多くの体験的な学びを得てはいるものの、その学びを客観的に捉え、考察し、深めることは難しい現状がある。保育の見方や考え方が曖昧な学生は、指導保育者の実践や自分の実践、子どもの姿などをどう捉え、理解すればよいのか分からず、「子どもが喜んで活動してくれて嬉しかった」や「保育者の声掛けで子どもの活動が深まることに驚いた」など全体の印象でしか振り返ることができていないと実習記録等から考察できる。

学生が実習を通して保育省察力の基礎である、保育の見方、考え方を理解し深める手立てを探究することは、高い資質能力や教育（保育）実践力を身に付けた保育者を養成するために重要な課題といえる。

そこで、本研究では、保育省察力の基礎を身に付けるための方略として、学生が保育者モデルとしての現職保育者の援助を観察し、その保育場面を事例として言語化した上で、考察し、より良い援助方略を導き出すという、実証的研究を教育実習の課題とした。ここで、保育者の援助といっても様々な状況が考えられ、視点が明確化できない。そこで、特に学生がこれまでの実習で課題と感じていた、具体的な援助方法を自己課題として設定し、その援助場面を観察することとした。また、省察力とは自分の実践を反省的に考察することであるが、省察力の基礎となる保育の見方、考え方を深めるためには、学生が自分の実践を振り返るだけでは不十分である。先述の小川¹⁾の言葉にあるように、その出発点は、子どもと保育者の関係理解であり、保育者モデルとしての指導保育者の行為や子どもの姿を通して、保育援助についての見方、考え方を深めることができる。

さらに、実証的研究の手法は、実践を観察し、考察することで、課題を解決し次の課題を見つかるという実践研究の手法とも重なる。こういった

経験は保育実践力としての省察力を身に付けるだけでなく、教育課程コアカリキュラムの教育実習の全体目標にある保育実践研究の基礎的な能力や態度を身に付けることにも繋がると考えられる。

以上のことを踏まえた上で、学生のレポート内容を質的に分析し、その有用性を検討することを本研究の目的とする。

第2章 方法

(1) 対象

本学2年次生等 教育実習Ⅱ履修者 75名

なお、本学は保育士資格、幼稚園教諭二種免許状の取得が可能な短期大学であり、ほとんどの学生が保育実習、教育実習の両方に参加する。各実習時期については以下の通りである。(表1)

表1. 本学の实習時期

1年次	保育実習Ⅰ（保育所）9月、11日間
	保育実習Ⅰ（施設）12月or3月、10日間
	教育実習Ⅰ（幼稚園）1月～2月、2週間
2年次	教育実習Ⅱ（幼稚園）9月、2週間
	保育実習Ⅱ（保育所）11日間、または 保育実習Ⅲ（施設）10日間

保育実習Ⅰ（保育所・施設）、教育実習Ⅰと一通りの実習を終了した後の2年生9月に実施する教育実習Ⅱにおいて、実証的研究を課題とした。

(2) 実習時期

2018年9月3日～9月14日

（課題レポートは実習後に提出）

(3) 実証的研究方法

これまでの実習を踏まえ、各自保育者の援助に関する実習課題を設定する。実習期間中に課題に応じた観察事例（2つ以上が望ましい）を文章化し考察する。その内容から援助方略を導き出す。

(4) 分析対象

実習後に学生が上記の内容で作成したレポートを質的に分析し、以下の3点について考察することで、実証的研究の有用性を検討する。

- A. 学生の自己課題の内容
- B. 課題に応じた事例の内容
- C. 学生が導き出した援助方略の内容

第3章 結果と考察

A. 学生が設定した実習課題

各学生が設定した援助に関する実習課題の内容をコード化し複数のカテゴリーに分類した。その結果6つのカテゴリーに分類できた。(表2)

表2. 学生が設定した実習課題

①	子どもが主体的に意欲を持って活動するための援助	51名
②	子どもが活動に集中し遊びを展開していくための援助	7名
③	園行事における援助	6名
④	喧嘩が起こった際の援助	4名
⑤	特別支援に関する援助	3名
⑥	その他	4名

・各課題は具体的な援助であり、学内の授業やこれまでの実習を通して、必要性をもって設定していると推察され、学生は自分が課題とする援助の視点が明確化できていることが分かる。

・「子どもが主体的に意欲を持って活動するための援助」を全体の66%の学生が課題として設定していた。平成30年4月施行の幼稚園教育要領等では、「主体的、対話的で深い学び」が強調され、保育を行う上では非常に重要な視点である。また、7割近くの学生が設定している課題ということから、本研究では、以下、本課題に関する内容を取り上げ考察することとする。

B. 学生が観察を通して記述した事例

学生が「子どもが主体的に意欲を持って活動するための援助」という課題について観察した事例場面を分類した結果、3つのカテゴリーに分類できた。(表3・図1)

表3. 学生が観察した事例場面 (合計79事例)

①	一斉活動の場面 (運動会の練習・制作・リズム遊び等)	52事例
②	生活の場面 (昼食・片付け等)	20事例
③	自由遊びの場面	7事例

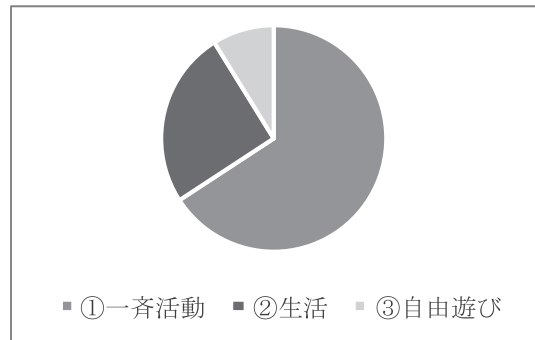


図1. 学生が観察した事例場面

・「子どもが主体的に意欲を持って活動するための援助」を課題にした学生51名のうち、全事例数は79であった。平均1人1.5事例と少なかった。観察した内容を事例として文章化することは、学生にとって難しく、また、実習記録、設定保育や全日実習の指導案作成等、時間的にも余裕がなかったためと推察される。

・事例場面は一斉活動での事例が66%と多かった。この時期は運動会という大きな行事を行うところが多く、学生は運動会の練習に意欲的に参加できるための援助や一斉活動に楽しく夢中になって取り組めるための援助に注目していることがわかった。事例の内容も一斉活動に参加しようとする子どもが保育者の働きかけで、生き生きと楽しく活動に取り組む様子を捉え、その時の援助方略をまとめている学生が多かった。

C. 学生が事例を基に導き出した援助方略

「子どもが主体的に意欲をもって活動するための援助」に関して、学生の考察から読み取れる援助方略をコード化し複数のカテゴリーに分類した結果、以下の4つに分類できた。(表4)

表4. 保育者の援助方略

①	子ども理解に基づく援助 (寄り添い・共感・傾聴)
②	個々に応じた援助
③	前向きな声掛け・援助 (励まし、見守り、承認)
④	自ら考え行動するための援助 (問いかけ、対話、見通し)

①子ども理解に基づく援助について

子どもが意欲をもって主体的に取り組むには、子どもが興味関心を持っていることや、子どもの

発達（力量）、子どものその時の驚きや問いや思いに寄り添い、理解することが重要である。

そのことについて実感を伴って気づいていた学生のレポート内容を示す。

事例①

4歳児のA君は活動中とても元気でやる気がある。しかし、次の活動への切り替えがなかなかできず、目に入ったものに意識が向き、遅れて一斉活動に参加することがある。しばらく様子を見てそれでも気持ちが一斉活動に向かないと、保育者はA君の好きなことを話して、意識が向くようにしていた。

この事例から、学生Aは次のように考察している。

子どもの言葉に耳を傾けることが大事。子どもが他に興味移った時、いつも何かを発見したり、考えたりなどして、そのことを他の誰かにも伝えようとしていた。そのことを理解し、共感することで子どもも気持ちよく次の活動に移ることができた。

保育者中心の保育では、保育者の思いが先行し、子どもの思いが置き去りにされることがある。保育者のねらいと子どもの思いをすり合わせながら保育を展開することが重要であるが、非常に難しいことでもある。一斉活動では子どもの育ちを見据えて保育者が念入りに計画を立て実践していくが、保育者のねらい通りに進まない、どうしても子どもに無理をさせてしまうことがある。

そんな中で、学生は一斉活動に参加しようとする子どもには、その子なりの理由があるということに気づき、その思いを受け止めてもらえることで、一斉活動にも心が向き、その面白さを感じ活動に入っていけるということを学んでいた。

保育者の願いを押し付けず、子どもの思いに共感し、理解した上で、次の活動を進めていくことの重要性について子どもや保育者の姿を観察し、言語化する中でその意味を捉え、理解を深めることができていた。

②個々に応じた援助

一人一人に応じた援助は集団一斉活動の中でも

重要であり、個々の子どもの特徴や課題を見極め、それぞれに応じた適切な援助の重要性を学んだ学生のレポートから考察する。

事例②

運動会の競技であるジャンプ遊びができない子どもが数人いた。保育者は一人一人の特徴やなぜできないかをよく見て、アドバイスをしていた。するとできるようになった子どもが増え、それから何度も練習しその競技が大好きだと言っていた。

この事例から学生Bは次のように考察している。

できない子どもは少し諦めかけていたが、保育者のアドバイスが的確だったため、子ども自身がおもしろいと感じることができ、頑張れた。一斉活動の中でも一人一人をよく見て、出来ない子には必ずその理由や原因があるので、一人一人に応じて声の掛け方も変えていくことが大切だと思った。そして、一人一人の頑張っている姿を認めることで子どもたちの気持ちを高めることができたと思った。

別の学生Cも同じように運動会で演じるダンスを練習している4、5歳児の様子から、次のような考察をしている。「子どもたちが楽しんで活動できるように、意欲を引き出すことが重要で、そのため、一人一人の個性を理解し、援助を行うことである。一人一人性格の違いによって、活動の取り組み方も違う。同じ練習をしているからといって、みんな同じように声を掛けるのではなく、その子が興味を持ち、集中できるように援助することが大切だと分かった。」と述べている。

子どもたちは一人一人違った個性があり、思いも違うということを経験を通して理解し、個々に応じた援助の重要性を実感を持って学んでいることが分かった。

また、別の学生Dは、支援が必要な子どもの観察やかかわりから、その子の思いを理解し、適切な援助を行うことが重要であると感じていた。実習を通して支援が必要な子どもについて知ることができ、個別支援の重要性を経験を通して学んでいることが分かった。

③前向きな声掛け・援助（励まし、見守り、承認）

子どもが意欲的に活動を続けるためには、叱

る、注意するといった働きかけではなく、励ましたり温かく見守ったりするという前向きなかわりが重要だと感じた学生のレポートから考察する。

事例③

給食で苦手な野菜が出てきて、食べ進まない3歳児CちゃんとD君。保育者は「この野菜を食べるとかっこいいお兄ちゃん、お姉ちゃんになれるよ」と声掛けしていた。
「Cちゃん、D君頑張っているね」など気持ちが前向きになれるような言葉掛けをしながら食事の援助をしていた。すると「お友達と頑張る！」と言って食べ始めた二人。完食をした時には十分に認め、一緒に喜びを共感していた。

この事例から学生Eは以下のように考察している。

子どもたちへの言葉掛けによって子どもの行動が変わってくると学んだ。子どもが前向きになって動くことは大切だ。保育者は否定的な言葉掛けをするのではなく、「○○ができるよ」と前向きな言葉掛けをすることと、出来たときには十分に認めて、「頑張ったね」と声掛けすることで、子どもは次も頑張ろう、頑張ってよかったと感じて、次の活動に繋がられると学んだ。

子どもは保育者の表情を常に伺っているの、普段の保育者の（明るい）表情・言葉掛けの大切さを知ることができた。

「何ができないと困りますよ。」「何々しなければいけません。」というネガティブな表現ではなく、「何々ができるともっと楽しくなる」「何々することは楽しいよ」などとポジティブな声掛けと、頑張っている時に励ましたり、温かな眼差しで見守ったりすること、そして、達成した時の承認や喜びの共感はそのやる気を引き出し、諦めず取り組む力を育てることを学んでいることが分かった。また、保育者がいつも明るい笑顔で何事も前向きに捉え、進めていくことが、知らず知らずのうちに子どもにより影響を与えていることも感じており、深い考察ができていたと感じた。

給食の場面だけでなく、一斉活動や自由遊びなど様々な場面で前向きな声掛け、援助の重要性を学んでいる学生が多かった。

④自ら考え行動するための援助（問いかけ、対話、見通し）

いつも保育者が指示を出したり、解答を与えたりしては、子どもは自分では考えず、保育者の指示を待つようになってしまう。

子どもが主体的に活動するためには、まずは子どもが自分で考え行動することが重要である。しかし、集団生活の場である保育現場では、保育者が指示を出し、子どもの問いに対して解答を与えてしまうことがある。子どもが自ら考え行動するための援助の重要性を学んだ学生のレポートから考察する。

事例④-1

自由遊びの時に、園庭で遊んでいた4歳児のEちゃん、Fちゃん、Gちゃん。ブランコで遊ぼうとしていたが、乗れるブランコは2つだけで、誰が乗るか言い争いになっていた。保育者はみんなで仲良く遊ぶにはどうしたらいいのか、子どもたち自身に考えるよう声を掛け見守っていた。

事例④-2（同学生）

リズム遊びをクラス全員でしていた時、その場に二人で手を繋ぎ円を作って座る役と一人で走り回る役があった。HちゃんはI君と手を繋ぎたいと言い、I君は走りたいとそれぞれ自分の意見を言っていた。保育者は両者に対して、それぞれの思いを繰り返し伝え、「どうしたらいいんだろうね」と声を掛け、自分たちで考え、互いに相手のことを考えて、納得して遊べるように声掛けをしていた。

この事例から学生Fは次のように考察している。

子どもが叩き合いや危険なことをする以外の言い争いなどのトラブルの時は保育者が「こうしたら」などと口出しをせず、まずは子どもたち自身がどうするのか観察したり、子どもたちで考え合えるような声掛けをしたりする。そうすることで保育者が出した答えを正しいと思い込み、同じような場面になった時もその答えになってしまうことを避けることが大切だと学んだ。問題は一つでも解決方法は何通りもあるので、より良い方法を子どもたちが話し合い、考えることが大切で、保育者は子どもの考えに共感し受け止めることが大切だと感じた。

子どもたちが自分たちで考え、保育者と子どもや子ども同士の対話を通して考えを広げ、より良い方法を導き出すという援助が重要だと感じていることが分かる。また、自ら活動を進めていくには活動の見通しが持てることも重要で生活の流れを子どもたちが主人公になって進めていけるような働きかけについても事例を通して考察している学生がいた。

学生は実習前の学内での授業の中で、上記の①から④までの援助方略について知識として理解していると思われるが、実習の中で、子どもたちと保育者の姿を目の当たりにし、そういった援助の効果を、実感を伴って往還的に学んでいることが分かった。

こうして、援助に関する具体的な自己課題を持つことで、保育を見る視点が明確化でき、自己課題に関する事例を言語化することで、保育という営みをメタ認知することができている。そして、子どもと保育者の思いや関係性、それぞれの行動の意味を客観的に考察し、援助方略について考えることができていた。

これらのことから、保育省察力の基礎的な力として、保育の見方・考え方を養い深めることに実証的研究は有用であることがわかった。さらに、実習を通して教育（保育）実践力の基礎を身に付けるだけでなく、実証的研究方法は保育現場でも今重要とされている、教育（保育）実践研究の基礎も身に付けることができたと考えられる。

また、それと同時に、学生が教育実習中に実証的研究を行うことに対して、難しさや課題も見つかった。

第4章 今後の課題

実証的研究を行う上での課題として、各自の事例記録が少ないこと、一斉活動における事例に偏っていることなどがある。学内の事前指導の中で、保育者の援助に関する多様な保育場面を観察する視点を与えることや、観察した保育事例を言語化し文章で表現する能力を高めることが必要である。

また、実習中やるべきことが多い学生の負担を軽減し、研究的視点で保育を学べるような実習内

容・方法の検討が必要である。

さらに、学生が他の学生や養成校教員との対話を通して、新たな保育の見方や考え方に触れる体験をもつなど、保育省察力の基礎としての保育の見方・考え方を深める手立てをさらに検討していく必要がある。

引用文献

- 1) 文部科学省 教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会 (2017) 教職課程コアカリキュラム p29
- 2) 小川博久 (2013) 保育者養成論 萌文書林 p231
- 3) 同書 p262

参考文献

- ・金 政志 (2009) 新人保育者による省察の意味とその変容を支える支援の在り方-保育実践後の「保育者間の話し合い(対話)」の中から- 保育学研究第47巻第1号 p 66-78
- ・栗原ひとみ (2014) 実習生の自己課題の捉え方 暁星論叢第64号 p 1-16
- ・前田美智子・三井圭子・黒崎令子 (2015) 本学学生の保育実習・幼稚園教育実習における学びと課題-実習事前指導・実習・実習事後指導を通して-兵庫短期大学部研究集録49号p29-48
- ・榊原尉津子・杉山佳菜子・小川真由子 (2019) 学生の考える保育実習の目標と達成度 鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要人文科学・社会科学編第2号p271-283
- ・山田秀江 (2011) 実習事後指導に関する一考察 四條畷学園短期大学紀要 第44号p25-31
- ・山田秀江 (2012) 幼稚園教育実習における保育実践力の学びに関する一考察-責任実習の実践報告から- 四條畷学園短期大学紀要 第45号p51-61

付記 本研究はOMEP アジア・太平洋地域会議2019 in Kyoto,JAPAN にて発表したものを加筆修正したものである。

—2019.9.20受稿、2019.9.20受理—

**A study of strategy for students to acquire the ability to reflect on Childcare
-From empirical research in kindergarten education practice-**

Hidemi Yamada

Shijonawate-gakuen Junior College

Abstract

To lay the foundation needed to reflect on childcare, this study considers the usefulness of empirical research in kindergarten education practices. The teaching practice is based on empirical research in which students observe the practices (actions) of childcare providers as a model, examine the childcare setting by writing a case study, and then derive better support strategies. The details of the students' reports are qualitatively analyzed and the usefulness of their research is considered. That result, the process of clarifying perspectives on childcare by identifying specific issues related to support and writing it as a case study, allows for students to have metacognition of the work of the childcare provider. Then, they were able to objectively consider the feelings and relationships between the children and childcare providers, in addition to the significance of each action, and think about support strategies. We thus found that empirical research formed the basic ability to reflect on childcare, and was useful to develop and deepen how students view and think about childcare.

Key words : reflect, how to view and think about childcare, empirical research, kindergarten education practices